

# 近世後期江戸における遊里語の行為指示表現

## —滑稽本・人情本との対照を通して—

森 勇 太

### 1 はじめに

近世後期の重要な言語資料として洒落本が挙げられる。洒落本は遊里を描いているという特殊性はあるものの、近世後期に江戸・上方・尾張等で一定量が発刊され、話し言葉資料としての価値も高い。近年では「日本語歴史コーパス江戸時代編」(国立国語研究所)でも多数の作品がコーパス化されるなど、その重要性は高まっている。

しかし、遊里語はどの程度「特殊」なのだろうか。この点については、真下(1966)、山崎(1990)、村上(2015)で扱われているが、近年ではあまり議論になることが多くない。待遇表現は遊里語の特徴としてよく指摘されるものであり、その「特殊性」を理解することは重要である。本稿では、待遇表現の中でも行為指示表現に着目して、遊里語の行為指示表現の運用が、他の資料とどの程度共通し、どの部分が異なっているか、ということを考えたい。

本稿の構成は以下のとおりである。2節では、近世期の行為指示表現研究と、洒落本による研究について述べる。3節では、洒落本の行為指示表現について述べる。4節では滑稽本・人情本の行為指示表現を対照させる。最後の5節はまとめである。

### 2 研究の枠組み

#### 2.1 近世期の行為指示表現研究

行為指示表現の研究は、これまで、依頼・命令(指示)表現の研究として進められており、多くの成果が挙げられている。近世期江戸語の行為指示表現の研究としては、小松(1971)等、敬語概説の中で取り上げられており、また、小島(1974)、広瀬(1991)等に精緻な記述がある。近年でも山田(2014)、福島(2015)で調査がなされている。福島(2015)は近世後期の洒落本、滑稽本(『浮世風呂』)、人情

本（『春色梅兒誉美』『春色辰巳園』）を調査し、その行為指示表現の使用形式の差異について述べている。洒落本・滑稽本・人情本の順で命令形の割合が減少し、「な」（「書きな」）・「ねえ」（「書きねえ」）・「お連用」（「お書き」）の割合が増加しているという傾向が見て取れる。ただし、福島（2015）は、洒落本の遊女のデータを集計の対象としていない。

これらの研究は、待遇表現研究の延長線上で行われてきたものであり、どのような形式があるか、形式と待遇度の整理、また形式と話者の位相との関係については特に整理が進んでいるといえる。しかし、待遇表現の研究においては、位相面・形式面のみならず、運用の側面からの研究も必要となる。

行為指示表現は、話し手と待遇される相手や聞き手との関係のみならず、発話意図によって選択される形式の幅が多いという点で、通常の待遇表現とは異なる性格を持つ。先行研究によって、江戸語では、どのような位相もある程度の段階性を備えた敬語を持っていることがわかっているが、運用の幅がどのようになっているか、という点は明らかではない。その点で、そもそも発話意図による選択の幅の大きい行為指示表現は、それぞれの位相や場面ごとの差を見るのに適しており、相違点を見つけやすいと考える。このため、本稿では資料内の人物・場面間、また資料間の対照を通して、行為指示表現の運用の地域差を考えることとする。

また、近年注目されるのは、単に話者の位相面の違いに着目するのではなく、同一の話者も複数のスタイルを切り替えて発話を行っている、というスタイル切り替えの考え方である。待遇表現研究においては、佐藤（2014）が注目される。佐藤（2014）は、桑名藩下級武士の日記『桑名日記』と他の武家資料の様相から、近世末期の桑名藩下級武士が、極めて公的な場面で用いられる X 体系、主に家庭の外で遭遇する会話場面で用いられる  $\alpha$  体系、家庭内、および、生活水準と家庭環境をおなじくする藩士仲間の中で用いられる  $\beta$  体系の 3 種の体系を持っていることを明らかにした。待遇表現以外でも渋谷（2015）は山東京伝が記した黄表紙・洒落本等で用いられる音便形・非音便形を調査し、作品ジャンルごとに差異があること、それが、ジャンルごとのスタイルの差異を反映していると述べる。このような研究にあるように複数のスタイルがあるとして場面差を積極的に記述することで、形式ベースでは追いつく差異を確認することが重要である。

## 2.2 言語資料としての洒落本

洒落本は、“延享年間（1744～1748）から文政年間（1818～1830）にかけて、

初めは上方、後には江戸を中心に刊行された一種の遊里小説”であり、“会話文体によって遊里を描”いたものである（「洒落本」『日本語学研究事典』，明治書院，鈴木丹士郎氏執筆）。会話によって話が展開するという点は、行為指示表現研究に適している資料である。遊里語には、「なんす」や「ありんす」を代表とする敬語形式、および遊里特有の語彙が存在するが、当時の一般社会の女性語との連続性も指摘されている。例えば、真下（1966）では、遊里語の研究は、町家の女性との差異を中心に見るべきだと述べられているが、その中で、(1)のように遊里の世界を一般社会と交渉があるものとして捉えている。

- (1) 遊里語が、主として遊里に住む遊女という特殊な集団社会の中に行なわれた言語であるにしても、遊里自体が、冒頭にも触れたように、一般の社会から全く隔絶した社会ではなく、常に一般社会と交渉があり、遊女自身も町家の女性から「身売り」によって転身したものが多いため、遊里語と一般社会の女性語との間には、根本的な差異はさほど認められないからである。したがって遊里語の研究の対象となるものは、遊女が用いた言語全体について行なわれるのではなく、主として、その中で一般町家の女性語と異なった点について行なわれるべきであると思う。 (真下 1966 : 9)

一方で、遊里といういわば日常とは少し離れた社会であるために、特別なコミュニケーションのスタイルが取られているのではないか、という点には留意する必要がある。例えば、山崎（1990）は上方の遊里の待遇表現の特徴について、(2)のように述べている。

- (2) 遊里ことばの待遇表現上の特徴は客の身分階級の差別によって表現があまり変化しないこと、極めて上位の者に対しても、また多少下位の者に対してもアイマイな表現が行なわれていることである。これを普通社会の待遇表現の段階と比較するとかなり異なった機構になっている。 (山崎 1990 : 660)

また、洒落本のことばを、そのまま当該地域のことばとして見てよいか、という問題もある。地方出身者が江戸に来て遊女になることがあり、遊里語は方言の矯正のために用いられたということも指摘がある（湯澤 1964, 村上 2015）。また遊里語と各地方言との連続性・影響も指摘されている（近藤 1996<sup>2</sup> 等）。ただし、村上

(24)

(2015) は、上方では事情が異なり、遊女は上方語を母語としていたのではないかと考えている<sup>1)</sup>。このように遊里語はその他の庶民の言語との共通点や相違点が指摘されている。特に待遇表現は遊里語の中でも目立つ部分であり、その運用の位置づけについては慎重に検討する必要がある。

### 2.3 本稿の調査資料

本稿では、以下の作品を調査した<sup>2)</sup>。

享和以前（～1804）：辰巳之園 [1770]，遊子方言 [1770]，甲駟新話 [1775]，妓者呼子鳥 [1777]，多佳余字辞 [1780]，通言総籙 [1787]，繁千話 [1790]，傾城買二筋道 [1798]，松登妓話 [1800]，恵比良濃梅 [1801]，  
文化以後（1804～）：傾城買杓子木 [1804]，船頭部屋 [1807]，通客一盃記言 [1807]，廓字久為寿 [1818]，青楼胸の吹矢 [1821]，斯農鄙古問 [1821]，東海探語 [1821]，花街鑑 [1822]，青楼快談玉野語言 [1822]

享和以前と文化以後を分けたのは、江戸語の形成段階を考慮したためである。小松（1985）は、江戸語の形成過程を主に3期に分けており、第1次形成は寛永期（1624-1645）で、共通語として武家のことばが成立する時期、第2次形成は宝暦・明和期（1751-1772）で、武家・町人も含む住人全体に江戸の共通語が生まれる時期、第3次形成は文化・文政期（1804-1830）で、町人間の階層による言葉の分化が明確化する時期と位置づける。このうち第3次形成期は上方語的要素が衰退し、東国語的要素が組み込まれ、江戸語の特徴が顕在化する時期であり、連母音の融合など下層民の江戸訛りが江戸語の特色となる。矢島（2016）も否定疑問形による行為指示等から、江戸語のコミュニケーションスタイルを特徴づける表現がこの第3次形成期に生まれるとしており、第2次形成と第3次形成のあいだで時期を分けることにした。

## 3 洒落本の行為指示表現

### 3.1 場面の分類

洒落本は基本的に遊里の世界が描かれるために、遊女が客を待遇する場面が多いなど、作品間で場面の共通性が大きい。本稿では、話し手の男女で分類するととも

に、場面でも分類を行った。洒落本の中でも遊里内の人物が男性を接待する場面(以下, “接待場面” とする)と, 遊里内の人物間の会話場面(以下, “職場場面” とする)に分類し, それぞれの行為指示表現の数を集計した。

(3) a [女]「もし七兵衛さん, 誰ぞお呼なんし。」

b [女郎]「お中さん」[お中]「サアサアきねエきねエ」

(辰巳之園：313 [1770])

(3a)「お呼なんし」は遊女から客の七兵衛に向けられているものであり, 接待場面である。(3b)「きねエ」は, 小花屋の娘・お中から女郎に向けられているものであり, 職場場面とした。本稿では, 「遊里内の女性」の範囲は広くとり, 遊女屋で働く女性全体を対象としている。なお, この場面の分類は洒落本を基本としたものであり, 洒落本以外の作品については, 4 節で述べる。

### 3.2 各形式の全体数と用例

まず, 行為指示表現の形式を分類し, 表 1 に挙げた。分類は, 形態的に敬語を使用しているか, 使用していないか, という観点で行ったが, 「おー」「ーおくれ」等, 命令形類に敬語形式として接頭辞「お」だけが付与された形式は, その他の敬語使用の形式と待遇価値が異なることが予想されるため, 別立てで示した。

表 1 語例とその分類

グループ	分類	語例 (「書く」等を用いた作例)
非敬語	命令形類	書け (命令形命令), 書きや (連用形+や, 連用形+やれを含む), 書きな (ナ形命令)
	受益類	書いてくりや・書いてくんな
	否定疑問類	書かんか
オ	オ命令形	お書き (おー)
	オ受益	書いておくれ
敬語	敬語命令形類	あがれ (「食べる」の意, 特定形), 書きなさい (一尊敬語), お書きなさい (お一尊敬語)
	敬語受益類	書いておくんない, 書いてください
	敬語否定疑問類	お書きなさらんか, 書いておくれなさらんか

表2 洒落本資料の行為指示表現（享和以前）

グループ	形式	享和以前（～1804）				
		女性		男性		
		接待	職場	客・接待	店主・接待	店主・職場
非敬語	命令形命令	2 (0.93%)	1 (1.43%)	20 (14.29%)	1 (5.26%)	1 (11.11%)
	連用形+や	2 (0.93%)	16 (22.86%)	18 (12.86%)	—	1 (11.11%)
	ナ形命令	5 (2.34%)	12 (17.14%)	16 (11.43%)	—	3 (33.33%)
	テ形命令	1 (0.47%)	—	4 (2.86%)	—	—
	—くれ	—	—	5 (3.57%)	—	—
	—たも	—	—	1 (0.71%)	—	—
	—くりや —くんな	1 (0.47%)	4 (5.71%)	32 (22.86%)	—	—
否定疑問 (標準の接続)	1 (0.47%)	—	1 (0.71%)	—	—	
非敬語グループ合計		12	33	97	1	5
オ	おー	2 (0.93%)	—	—	5 (26.32%)	—
	—おくれ	—	—	1 (0.71%)	—	—
オグループ合計		2	0	1	5	0
敬語	特定形	8 (3.74%)	—	3 (2.14%)	—	—
	—尊敬語	70 (32.71%)	9 (12.86%)	25 (17.86%)	—	—
	おー尊敬語	90 (42.06%)	14 (20.00%)	8 (5.71%)	13 (68.42%)	2 (22.22%)
	—くんなさい —くんなんし	1 (0.47%)	2 (2.86%)	4 (2.86%)	—	—
	—おくんなさい —おくんなはれ	29 (13.55%)	12 (17.14%)	—	—	2 (22.22%)
	—ください	2 (0.93%)	—	2 (1.43%)	—	—
	否定疑問 (敬語接続)	—	—	—	—	—
敬語グループ合計		200	37	42	13	4
合計		214	70	140	19	9

なお、丁寧語の有無について、今回は問題としなかった。また本稿では、「—するがいい」などの間接的な表現は含めず、命令形相当の形式、および疑問の形の行為指示表現を対象とした。ただし、命令形相当形式・疑問形式を取りながら、実際には行為指示の意図を持たないもの（願望、条件表現になるもの等）は集計には含めていない。

これらの場面ごとの用例数を示したのが表2・表3である。以下、場面ごとに、遊里の女性の接待場面、職場場面、男性客の接待場面の順に述べる。

表3 洒落本資料の行為指示表現（文化以後）

グループ	形式	文化以後（1804～）				
		女性		男性		
		接待	職場	客・接待	店主・接待	店主・職場
非敬語	命令形命令	-	-	11 (12.36%)	-	-
	連用形+や	-	1 (4.00%)	6 (6.74%)	-	-
	ナ形命令	-	7 (28.00%)	8 (8.99%)	-	1 (50.00%)
	テ形命令	-	1 (4.00%)	-	-	-
	一くれ	-	-	2 (2.25%)	-	-
	一たも	-	-	-	-	-
	一くりや 一くんな	-	4 (16.00%)	10 (11.24%)	-	-
否定疑問 (標準の接続)	-	-	2 (2.25%)	-	-	
非敬語グループ合計		0	13	39	0	1
オ	おー	1 (0.89%)	1 (4.00%)	-	-	-
	一おくれ	-	-	-	-	-
オグループ合計		1	1	0	0	0
敬語	特定形	1 (0.89%)	-	2 (2.25%)	4 (33.33%)	-
	一尊敬語	16 (14.29%)	5 (20.00%)	22 (24.72%)	1 (8.33%)	1 (50.00%)
	お一尊敬語	57 (50.89%)	6 (24.00%)	1 (1.12%)	6 (50.00%)	-
	一くんなさい 一くんなんし	-	-	18 (20.22%)	-	-
	一おくんなさい 一おくんなはれ	33 (29.46%)	-	2 (2.25%)	-	-
	一ください	3 (2.68%)	-	5 (5.62%)	1 (8.33%)	-
	否定疑問 (敬語接続)	1 (0.89%)	-	-	-	-
敬語グループ合計		111	11	50	12	1
合計		112	25	89	12	2

### 3.3 遊女の接待場面

まず遊女の接待場面を見る。遊女の接待場面は、ほとんどが敬語グループに偏っている。

- (4) [客]「これ[別の遊女]へ今夜はゐて、いと、たまには、もたせるも面白からうではないか」[女房]「なんさ。それはおよしなんし。」

(遊子方言：47 [1770])

(28)

しかし、非敬語グループの使用には享和以前と文化以後で若干の違いがある。享和以前では、非敬語グループの使用は少数ながら複数の形式で存在している。

- (5) a [お長]「何サ、かみさんの部やにでも、寝て居なさりやせ。」[志厚]「それも、久しいもんだ。」[お長]「なんでも、まつて居ねエ。」

(辰巳之園：309 [1770])

- b [しあん] 歌「むすほれし、千すちをわけてみだれがみ、手にとりどりのもの思ひ」[喜の]「おきやあがれ。」(通言総籙：368 [1787])

(5a) は「一尊敬語」「寝て居なさりやせ」も用いられているが、直後に「まつて居ねエ」と「一ねえ」が用いられている。(5b) のように命令形命令の使用もある。

一方で、文化以後で非敬語グループは用いられず、オグループも 1 例あるのみである。

- (6) [お玉]「アノこれは新板のしやれ本だと申て、只今かりました」[滝三郎]「フウ何といふ外題だへ。チツト見せなせへ」[お玉]「よんでお聞せな」

(花街鑑：②⑦ 69 [1822])

このことから、文化以後の時期では遊女の行為指示表現の運用が、より固定的になっていると捉えられる。ナ形命令は後に述べる『浮世風呂』『春色梅児誉美』において女性も使用しているにもかかわらず、接待場面の形式としては用いられず、敬語形式を固定的に用いていたといえる。

### 3.4 遊女の職場場面

遊女をはじめとした遊里内の人物も遊里内の人物どうして話すときには、非敬語グループの行為指示表現を用いる。ナ形命令は期間中を通して最も多い。また、享和以前は「連用形+や」が多いが、文化以後はほとんど用例が見られない。「連用形+や」の減少は江戸語からの上方語的要素の衰退として捉えられる。

- (7) a [お中]「おまつどん、梅大夫さんを聞にやりねエ」

(辰巳之園：306 [1770])

- b [お秀]「おせんどんかちつとよつていきな」(東海探語：②⑦ 19 [1821])

(8) a [喜の→おちせ]「おちせ、きものをだしてくりや。」

(通言総籙：368 [1787])

b [一重→呉葉]「コウ呉葉や、また誰か筆をもつていつたこつたぞ。おふか  
たまた外山さんだらふ。はやく取て来や。」 (傾城買二筋道：159 [1798])

その他、享和以前に見られた敬語受益類「一おくんなさい」が文化以後は全く用  
いられないことも違いである。

### 3.5 男性客の接待場面

男性客は、接待場面において、非敬語グループと敬語グループを両方用いている。

(9) a [志厚→女房]「かみさん見ねエ。凄ひ男だ。」 (辰巳之園：299 [1770])

b [しあん→女房]「もちつと、あつくしてくんなさへ」

(通言総籙：372 [1787])

享和以前と文化以後の相違点は、敬語グループの使用の割合が増加していること  
である。享和以前には敬語グループの用例は42例(全体の30%)であったのが、  
文化以後には50例(56.18%)となっており、半数以上を占める。受益型の割合も  
変化しており、享和以前は「一くりや」「一くんな」が32例(22.86%)あるのに対  
し、文化以後は10例(11.24%)である。そのことと相補的に享和以前では、敬語  
受益類が6例(4.29%)であったが、文化以後では25例(28.09%)が見られ、受

表4 文化以後洒落本の敬語形式

		さっしゃる	ある	くださる	なさる	おーなさる	なんす
傾城買杓子木	1804			2	1		
船頭部屋	1807	2	1	1			
通客一盃記言	1807	3			8		1
廓宇久為寿	1818			2	5		
青楼胸の吹矢	1821	1			2		
斯農鄙古間	1821				1	1	2
東海探語	1821				1		
花街鑑	1822				10		
青楼快談玉野語言	1822				2		

益類の使用という点でも敬語グループが増加しているといえる。

関連する現象として、やはりここでも行為指示表現の収斂が見られることも挙げておく。享和以前では、「連用形+や」「一たも」などを含め、さまざまな形式が出現していた。これは尊敬語形式にもあてはまり、文化以後の洒落本の行為指示表現は「一なさる」に集中してきている。表4では、文化以後の洒落本の「(お)一尊敬語」で用いられる敬語形式を示した。1820年代以降の作品では、「一さっしゃる」等は使われず、ほとんどが「一なさる」となっている。全体的に行為指示表現形式が収斂・単純化しつつあること、また敬語グループを用いる頻度が高くなっていることが注目される。

## 4 他ジャンルの作品との対照

### 4.1 『浮世風呂』の行為指示表現

前節で見た洒落本の行為指示表現の運用は遊里に特有のものなのだろうか。一般

表5 『浮世風呂』の女性の行為指示表現

グループ	形式	『浮世風呂』		
		同等の人物に 対して	非丁寧体どうして 話す関係	丁寧体どうして 話す関係
非 敬 語	命令形命令	7 (4.96%)	—	—
	ナ形命令	32 (22.70%)	31 (32.63%)	—
	—くれ	1 (0.71%)	1 (1.05%)	—
	—くりや	2 (1.42%)	2 (2.11%)	—
	—くんな			
非敬語グループ合計		42	34	0
オ	おー	36 (25.53%)	23 (24.21%)	3 (15.79%)
	—おくれ	6 (4.26%)	3 (3.16%)	1 (5.26%)
オグループ合計		42	26	4
敬 語	特定形	1 (0.71%)	—	1 (5.26%)
	—尊敬語	35 (24.82%)	32 (33.68%)	2 (10.53%)
	おー尊敬語	19 (13.48%)	2 (2.11%)	12 (63.16%)
	—おくんなさい	1 (0.71%)	1 (1.05%)	—
	—おくんなはれ			
	否定疑問 (敬語授受接続)		1 (0.71%)	—
敬語グループ合計		57	35	16
合 計		141	95	20

社会のことばと連続的だとしたら、どのような部分が連続的なのだろうか。本節では、滑稽本『浮世風呂』の女性の行為指示表現を観察し、このことについて考えたい。

『浮世風呂』（1809年）の2編・3編は女湯の様子が記されており、さまざまな階層の女性の会話が描かれている。表5は『浮世風呂』に見られる女性の行為指示表現をまとめたものである。『浮世風呂』の登場人物の関係はさまざまあるが、ここではスタイルの切り替えという面を重視し、非丁寧体どうして話す関係と丁寧体どうして話す関係に着目し、それぞれの用例数を出した。

『浮世風呂』において、非丁寧体どうして話す関係と丁寧体どうして話す関係を比較すると、遊女の接待場面での言語行動は、丁寧体どうして話す人々の言語行動に似ている。『浮世風呂』の丁寧体どうして話す関係における行為指示は、敬語グループのものが80%（20例中16例）を占める。

- (10) [奉公から戻ってきた娘の話] [きち]「明日は早々、お屋敷へ上ます」[いぬ]  
「ナゼエ、追願ひをなすつて、最二三日お泊なさいましなネエ」

（浮世風呂，2編：100）

ただし、「おー」や「おくれ」が一定数あるのは洒落本と異なる。「おくれ」の使用は洒落本等でも上方の作品により多いが（森 2018）、江戸で全く用いられないわけではない。

- (11) [お山]「サアお川さん、おめへの背中を出しな。」[お川]「アイそんならざつとやらかしておくれ」

（浮世風呂，3編：190）

#### 4.2 『春色梅児誉美』の行為指示表現

人情本『春色梅児誉美』（1832年）では丹次郎と芸者・米八や許嫁の阿長、また通い客藤兵衛とお由の恋愛模様が描かれる。ここでは、それらの人物間の会話を“恋愛場面”として、恋愛場面の行為指示表現と洒落本の接待場面の行為指示表現を比較していきたい。

表6に『春色梅児誉美』に見られる行為指示表現を示した。なお、表6では恋愛場面に加えて芸者としての接待・職場場面の用例数も挙げている。女性の恋愛関係の行為指示では、敬語グループが多いが、「おー」の使用も多いことが注目される。

表6 『春色梅児誉美』の行為指示表現

グループ	形式	『春色梅児誉美』			
		女性			男性
		対・恋人	芸者・接待	芸者・職場	対・恋人
非敬語	命令形命令	-	-	1 (2.22%)	1 (2.70%)
	連用形+や	-	-	3 (6.67%)	-
	ナ形命令	1 (2.44%)	-	9 (20.00%)	25 (67.57%)
	—くりや —くんな	-	-	-	6 (16.22%)
	否定疑問 (標準の接続)	-	-	2 (4.44%)	
非敬語グループ合計		1	0	15	32
オ	おー	19 (46.34%)	5 (45.45%)	2 (4.44%)	2 (5.41%)
	—おくれ	1 (2.44%)	-	1 (2.22%)	-
オグループ合計		20	5	3	2
敬語	—尊敬語	3 (7.32%)	1 (9.09%)	16 (35.56%)	1 (2.70%)
	お—尊敬語	4 (9.76%)	3 (27.27%)	2 (4.44%)	1 (2.70%)
	—くんなさい —くんなんし	-	-	1 (2.22%)	-
	—おくんなさい —おくんなはれ	12 (29.27%)	2 (18.18%)	8 (17.78%)	1 (2.70%)
	—ください	1 (2.44%)	-	-	-
	敬語グループ合計		20	6	27
合計		41	11	45	37

(12) a 〔阿長→丹次郎〕「アレサマアはやく言ておきかせよ」

(春色梅児誉美, 巻3:85)

b 〔阿長→丹次郎〕「兄さんもたんとおあがりな。そしてネ兄さんどふぞこ  
れからかわいがつておくんはないヨ」

(春色梅児誉美, 巻3:87)

「おー」が使われるのは、「見る」4例, 「見せる」「聞かせる」2例, 「来る(おいで)」3例などがあり, 比較的日常的で, 相手の負担の軽い行為指示に見える。もちろん「(お)—尊敬語」の形式でこれらの行為指示が見られないわけではないので, 完全に機能分担があるわけではないが, 話し手に利益があるときの行為指示である依頼に使われることの多い受益型について, 「—おくれ」ではなく「—おくんなさい」が用いられることが多いことも合わせて考えると, 行為指示の軽重が形式の選択に

影響していると考えられる。

次に、男性の行為指示表現を見る。『春色梅児誉美』の丹次郎は恋愛関係にある米八・阿長に対して、ナ形命令を多く用いている。

(13) a [丹次郎→米八]「そんならいいからはやく帰んなヨ」

(春色梅児誉美, 巻1:60)

b [丹次郎→米八]「米八やいい咄しを聞いて呉なヨ」

(春色梅児誉美, 巻1:58)

洒落本の接待場面における行為指示表現と比較すると、「一尊敬語」「一おくんない」の用例数が少ないことが注目される。洒落本で「一尊敬語」、特に「なさい」が多くなるということは、洒落本ではより待遇表現が固定的に運用されていることを示していると考えられる。また、男性にはほとんど「一おくんない」が用いられず、受益類の割合が少ない。洒落本では、各グループの受益類を合わせて41.57% (89例中37例, 文化以後) が用いられているが、『春色梅児誉美』では、18.92% (37例中7例) しか用いられない。話し手利益と思われる行為指示が全く見られないわけではなく、(14)は依頼の例と言えるだろう。当時の男性の、親しい関係の女性に対する話し方として、受益型を用いず、命令形類等を用いる傾向があったと考えられる。洒落本では、男性も「一おくんない」を用いているので、やはり洒落本では話し手利益の行為指示には受益型の形式を用いて、聞き手への言語的配慮を行うことが多かったと考えられる。

(14) [阿長]「ナゼマアそんなかわいそふなことをお言だねへ」[中略] [丹次郎]「じやうだんだヨ堪忍しな。」

(春色梅児誉美, 巻7:146)

全体的にいえば、洒落本の行為指示と『春色梅児誉美』の行為指示は、敬語グループがよく用いられることは共通しているが、待遇価値の比較的低い「おー」が用いられることが相違点である。洒落本のほうが、より固定的な運用であり、受益類など、より言語的配慮が示される形式を用いていると位置づけられる。洒落本で描かれる場面の多くは、遊女が男性客を待遇するという商業的な場面であるが、女性のほうは敬語グループを固定的<sup>3)</sup>に使用して距離を保って待遇し、男性客は敬語や受益表現などで言語的に対人配慮を示しながら、聞き手に取り入る言語行動が行わ

れていると解釈できる。

## 5. まとめ

本稿では、以下のことを述べた。

- 1) 遊女の接待場面では、非敬語グループが用いられることが少ない。特に文化以後、非敬語グループ・オグループはほとんど用いられず、敬語に偏った運用が行われる [3.3 節]。
- 2) 男性客は接待場面で非敬語グループ・敬語グループの両方を用いるが、文化以後は敬語グループの割合が増加する。形式上も、「連用形+や」や「一たも」が見られなくなり、敬語グループも「一なさる」「一なさい」以外が見られなくなるなど、収斂する傾向にある [3.5 節]。
- 3) 滑稽本『浮世風呂』における非丁寧体どうして話す関係と丁寧体どうして話す関係の行為指示表現を確認したところ、両者はともに同等の関係と考えられるにもかかわらず、丁寧体どうして話す関係のときには行為指示表現が敬語グループに偏る。洒落本において、行為指示表現が敬語グループに偏るのは、客に対して丁寧体で話すときに、敬語グループの行為指示表現のみを用いるという固定的な運用が行われているからだと位置づけられる [4.1 節]。
- 4) 人情本『春色梅児誉美』の恋愛関係を確認すると、女性は「おー」を一定数用いている。また男性は敬語や受益表現といった言語的配慮のある形式を用いない傾向にある。『春色梅児誉美』の場面よりも洒落本のほうが商業的な言語運用がなされていると考えられるが、洒落本では、女性はより固定的な運用に、男性はより言語的な対人配慮を示し、聞き手に取り入る言語行動が行われている [4.2 節]。

遊里語には非遊里のことばとの異なりがあるが、遊里という場の特性から説明できる範囲の異なりであり、非遊里の行為指示表現の運用とも連続的である。本稿では行為指示表現のみを調査したが、このような運用法が行為指示表現に特有のものなのか、待遇表現一般のものなのかについては、今後も検討していく必要がある。また、さまざまな地点で発刊されたという洒落本の特徴を生かした地域間の対照研究も今後の課題となる。

## 注

- 1) ただし、上方の遊里がすべて上方由来かということも定かではない。浜野(2007)には、京の奉公人に北陸、播州以西出身の者がいたことを述べている。また、舞鶴の遊里には、若狭北陸出身者が多くおり、また、京都から奉公してきた人も、他の地域から京に奉公に入り、その後舞鶴に来たのではないかという推定がなされている。このように、京の遊里も、他の地域からの人物を受け入れたのではないかという想定は可能であろうと思われる。
- 2) 資料の選定にあたっては、増井(2012)等を参照した。
- 3) このような遊里の女性の固定的な運用は、滝浦(2013)の「安心」型のコミュニケーションを思い起こさせる。現代標準語に見られる「安心」型のコミュニケーションを江戸期の遊女の言語行動に、萌芽的に見てとることができるかもしれない。
- [i] この「安心」と「信頼」の区別は、敬語型とポライトネス型の性質の違いを言い表すのに適しているように思われる。敬語という手段は、ある人間関係について“こう言っておけば大丈夫”という形で不確定性を捨象する。不確定性のなさが人びとに「安心」を与えるのである。敬語において規範性が重要視されるのもこの必要からだろう。(滝浦 2013: 115)

## 資料

- 読みやすさのため、句読点の加除、かなづかいなど、本文を改めたところがある。
- 遊子方言・傾城買二筋道 中野三敏・神保五彌・前田愛(校注・訳)(2000)『洒落本 滑稽本 人情本』新編日本古典文学全集 80, 小学館
- 辰巳之園・通言総籙 水野稔(校注)(1958)『黄表紙 洒落本集』日本古典文学大系 59, 岩波書店
- 江戸洒落本(上記以外) 洒落本大成編集委員会(編)(1978-1988)『洒落本大成』中央公論社
- 浮世風呂 神保五彌(校注)(1989)『浮世風呂 戯場粋言幕の外 大千世界楽屋探』新日本古典文学大系 86, 岩波書店
- 春色梅児誉美 中村幸彦(校注)(1962)『春色梅児誉美』日本古典文学大系 64, 岩波書店

## 参考文献

- 小島俊夫(1974)『後期江戸ことばの敬語体系』笠間叢書

- 小松寿雄 (1971) 「近代の敬語Ⅱ」『講座国語史 5 敬語史』第5章, pp.283-365, 大修館書店
- 小松寿雄 (1985) 『江戸時代の国語 江戸語』東京堂出版
- 近藤豊勝 (1996<sup>2</sup>) 『江戸遊女語論集』新典社
- 佐藤志帆子 (2014) 『近世武家社会における待遇表現体系の研究—桑名藩下級武士による『桑名日記』を例として—』和泉書院
- 渋谷勝己 (2015) 「山東京伝の作品に見るスタイル切り替え—音便形・非音便形を事例に一」高田博行・渋谷勝己・家入葉子 (編) 『歴史社会言語学入門—社会から読み解くことばの移り変わり—』第4章, pp.70-91, 大修館書店
- 滝浦真人 (2013) 『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
- 広瀬満希子 (1991) 「『浮世風呂』における命令法について—一位相を視点として—」『国文鶴見』26, pp.30-53, 鶴見大学日本文学会
- 福島直恭 (2015) 「後期江戸語における行為要求表現の諸相」『学習院女子大学紀要』17, pp.129-146, 学習院女子大学
- 真下三郎 (1966) 『遊里語の研究』東京堂出版
- 増井典夫 (2012) 『近世後期語・明治時代語論考』和泉書院
- 村上謙 (2015) 「近世後期上方における遊里語のあり方」『埼玉大学国語教育論叢』17・18, pp.1-10, 埼玉大学国語教育学会
- 森勇太 (2018) 「近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差—京・大坂・尾張・江戸の対照—」『日本語学会 2018 年度秋季大会予稿集』pp.115-122, 日本語学会
- 矢島正浩 (2016) 「否定疑問文の検討を通じて考える近世語文法史研究」大木一夫・多門靖容 (編) 『日本語史叙述の方法』pp.187-214, ひつじ書房
- 山崎久之 (1963) 『国語待遇表現体系の研究 近世編』武蔵野書院
- 山崎久之 (1990) 『続国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院
- 山田里奈 (2014) 「江戸後期における命令形による命令表現の使用—「お～なさい」「～なさい」「お+動詞連用形」を中心に—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』21-2, pp.139-152, 早稲田大学大学院教育学研究科
- 湯澤幸吉郎 (1964) 『廓言葉の研究』明治書院

付記 本稿は JSPS 科研費 (17K13467, 26244024) による研究成果の一部である。

(もり ゆうた／本学准教授)